國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

日本近代詩の発展過程の研究：与謝野晶子、石川啄木、萩原朔太郎を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: カッポンチェッリ, ルカ, Capponcelli, Luca メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002433

平成 28 年 9 月　博士学位申請

平成 29 年 3 月　博士学位授与

日本近代詩の発展過程の研究
－与謝野晶子、石川啄木、萩原朔太郎を中心に－

國學院大學大学院　文学研究科

ルカ・カッポンチェッリ

本論は、日本近代詩歌への発展を導いた与謝野晶子、石川啄木、萩原朔太郎を中心に、近代自我と近代国家の形成がいかなる影響関係の上に成立してきたかを解明することを目指している。晶子は近代短歌への道を開いた 20 世紀冒頭の日本新女性の代表的な人物でもあり、啄木と朔太郎の創作における晶子の影響は既に先行研究において指摘されている通りである。日本詩歌に新風を吹き込んだ三人の創作の接点ならびに、それぞれの創作に表出される自己と国家との関係を明らかにすることは、近代化に対する当時の文壇の風潮の理解につながるだろう。したがって本論では、自己と国家の関係を見出す方法として、三人の自己認識の在り方が外部世界と繋がる手段としての身体表象およびエロティシズムにあったことを明確にする。

詩歌の表現は、他の文学表現と同様に、各時代に流行する政治的、思想的、社会的言説を反映し、それぞれの歴史的・文化的文脈との関連性を持っている。また、それぞれの文脈によって、詩歌の表現に対する評価の基準も静的なものではなく、変容することがある。

時代の文脈によって、文学テキストに対する評価が変化するということは、その時代に主流となる文学的カノンにもよるものである。近代においては、文学的カノンの形成は特に国家思想に密接に関連していた。

近代の絶対的な観念として形成される国民国家、政治思想、国民アイデンティティーは、社会体制の基本的な枠となったものである。これらの観念は、近代における＜身体＞への認識論と思考様式にも大きな影響を及ぼし、政治および社会体制の根底を流れていた。当時の文学における自己表現は、この背景に立ち向かわざるを得なかったのである。そこで本論では、与謝野晶子、石川啄木、萩原朔太郎の創作と思考様式において、近代化に対する三人の認識と姿勢を探る研究を行った。

第一章では『みだれ髪』を中心に、自我表現とエロティシズムの統合に焦点を当て、それが聖と俗の二元性によって表出されるという問題を考察した。このような二元性は本来、西欧の人道主義に端を発するものだが、デカルトの心身二元論に展開されるという近代の思考様式の原型とも言える。晶子の作詩法において「聖」と「俗」という範疇は女性の身体の表象と結び付いており、さらにそれは近代的二元論に基づく、「良妻賢母」等の理念によって身体を統制しようとする権力および社会体制に対する反抗的な精神を表現していると言えるのである。しかしこの段階では、晶子の作品において他者は浪漫主義の精神に満ちている神秘的、形而上的な存在である。したがって、『みだれ髪』は当時の社会的因習を打破する新しい女性像を構築したものの、その近代的内面世界はまだ外部世界に向いていないのである。

次に、戦争を否定する詩『君死にたまふこと勿れ』の分析を通して、晶子の時代批評精神と女性としての自我意識との結び付きに着目した。時代批評精神と女権拡張論という二つの軸を含む姿勢において、女性身体の表象は中心的な位置を占めている。晶子の身体表現は政治及び社会体制が構築する＜良妻賢母＞の女性像を解体し、彼女の主張、すなわち女性身体の生命力は国家以前に存在する普遍的なもので、地球の再生等の大規模なイメージによって宇宙と一体化するという主張の背後には、浪漫主義精神が存在していることを明確にした。そして晶子の女権拡張論が帝国主義の肯定へと結びついた問題については、それが単なる思想的な転向ではなく、多数の要素の結合によるものとして本論では注目した。即ち、30 年代以降の晶子の戦争観と国家観は、『明星』の浪漫主義、日露戦争時代の人道主義、女性解放の訴えなどの様々な精神から成るものだったのである。それらは以下のようなものである。A） 彼女の戦争観は帝国主義への傾斜に密接に関わっている。（B）帝国主義の肯定は『満蒙遊記』から次第に明確になるが、晶子が求める帝國は普遍主義で、日本国民と他者（植民地の人民）との講和を目指すものである上、人道的で、国

際的な抱負を持っていたのである。この点について、『明星』時代の晶子の浪漫主義精神と通ずる側面がある。また、（C）地球や宇宙と一体化する女性の身体の隠喩を以て表現していた女性の力は、広まる日本帝國に通ずる側面がみられる。その動的な感覚は女権獲得、社会の革新と帝国を結ぶ一つのキー・ワードとして見ることができる。最後に、（D）戦時下の帝国はますます女性の協力を必要とする時代となり、女権を訴える団体の交渉力も高まる。晶子にとって現状の帝国政治体制の肯定は、女性の権利を主張する手段として認識されていたのである。

以上の通り、戦争に対する晶子の認識は、平和主義から戦争主義への転向という単純なものではなく、そこに『明星』の浪漫主義から女性問題への感心に至るまで、彼女の文学的な自我の形成の背後にある様々な精神に基づくものなのである。

第二章では、石川啄木に焦点を当て、初期の浪漫主義的創作における与謝野晶子と鉄幹の影響を確認した上で、高山樗牛の天才主義という理念が当時の啄木の自我認識に多大な影響を与えたことを明確にした。

『あこがれ』からの引用では、啄木の詩において現世と形而上の世界との対照的関係が描かれ、それは、光と闇、星と沼等のイメージによって表現されている。『あこがれ』の作品では、天と現世が別れるという構造が頻出しているが、これは、当時の啄木の作詩法の特色である。その二元性において、詩人は地上と天世を結ぶ存在である。これは『あこがれ』に集録された詩作品の根底にあるテーマである。

このように、詩人は天職であるという啄木の認識が創作上、表現されている。前章において考察した晶子の創作における天の世界と地上の世界の二元性は、啄木の浪漫主義的な新体詩と共通する特徴でもあり、その根底に芸術至上主義的な認識がある。しかし、両者の作品におけるこの二元性の構造は、性質的な相違を含んでもいる。例えば、『みだれ髪』の場合は、両世界を結ぶのは理想的な恋愛観であるが、これに対して、啄木の場合は、両者を直結させることが詩人の使命なのであり、前節で既に述べた通り、詩を書くことが彼の天職なのである。ここに、晶子の文芸観との相違点が指摘できる。

自我の解放を表現しようとする晶子は、自分が星の世界からくだった女神のような存在であるというモティーフを用いている。晶子は、その星の幸せな世界を歌によって再現

する。そこに、啄木の詩と同様に天地開闢というイメージが認められるが、それは恋愛によって「世」と「俗」、または「肉体」と「精神」の一体化が行われ、天上と地上の交差が成立するからである。その一方で、『あこがれ』の場合は、恋愛が中心的なテーマではなく、啄木は詩人であることによって自然と精神の一体化を追求する。詩、または文芸はその一体化によって天世の「永遠の生命」に近づくことができるという発想は、啄木の作詩法の軸となっている。それは、詩人の「天職」なのである。

『あこがれ』の根底にある天地開闢による天世と現世という二元性は、啄木の自我認識における高山樗牛の影響によるものであったことが明らかになった。この段階では、晶子と同様に啄木の自我の追求は、先験的で形而上的な存在としての外部への憧憬に基づいている。詩人の使命感の挫折は、啄木にとって次の展開に繋がる不可欠な過程であった。この挫折後、＜今＞という現実に目を向け、新たな自己認識の方法を見出そうとする。これは『一握の砂』の歌風へ繋がる文学的姿勢であり、本論では『一握の砂』の成立時期に書かれた『ローマ字日記』に着目した。その考察の結果、音声中心表記であるローマ字の使用は啄木にとって、内面と言葉を直結させるための実験的な手段であることが確認された。そして『ローマ字日記』における他者の発見に伴う自己の発見は、エロス的な対象としての女性の身体の観察を中心に表現する上で、音声中心のローマ字を用い、啄木が性の内面化を行おうとしているというのが本論での見解である。近世春本にみられる露骨で滑稽な性描写に比べ、啄木の場合はエロスの発見は始終真面目に行われ、自己強化と自己嫌悪という２つの方向の間で揺れ動く、不安定かつ不確定な自我の輪郭を表している。それが近代の男子のセクシュアリティというジェンダー的な問題の位置付けとなることを本論では重視した。次に、『一握の砂』と『悲しき玩具』の形成時期の短歌における身体表現に着目し、自己の同一性を得ようとする啄木の姿勢を見出すことができた。このように、啄木の短歌における身体部分の直視は、彼の心の姿、つまり心理を具体化させる技巧として見ることができるのである。本論ではこの点を啄木の創作上の内面の発見と深く関わる側面として捉え、現実と芸術との関係において啄木が大きな視点の変化を見せると論じた。こうした新たな姿勢は、近代国家強権に対する批判的な精神へと向かい、『時代閉塞の現状』を中心とした啄木の評論における、文学と時代批評精神とが結び付いた彼独自の評論へと繋がっていったのである。自然主義と国家強権に対する批判は、明治時代の第一世代と第二世代との対立として認識されおり、後者に属する啄木は社会の改善という理想を見

出す。このように、感情や形而上的認識が優位に立つ浪漫主義は、啄木の自我の発見のための必要な段階であったが、そこに地上と現世という形で表れる近代の二元論は「ローマ字日記」と『一握の砂』において身体への眼差しへと展開していく。断片化した自己の身体の統一性への奪回、他者の身体への直視は、現実における自己の位置の確認に必要な過程となり、＜今＞と＜現実＞に着目することは、啄木の創作における時代批評精神に密接に関わるのである。そして、感情が優位に立つ浪漫主義精神から、実証主義的な様式に属する＜理性＞は、啄木の現実直視の手段となるのである。

第三章では、朔太郎の初期の作品に焦点を当て、朔太郎の短歌創作における晶子と啄木の影響の外に、北原白秋や森歐外等の作歌が受容されていることを論じた。そして短歌創作から自由詩への過渡期において、全体として、自虐的な姿勢と現実への不適応という精神がその根底を成している。そして『浄罪詩編ノート』と『月に吠える』の中心にある実存的な苦悩を深める表現方法の探求は、口語自由詩形への移行が主な動機だと考えられる。これにより作品の題材は拡大され、宗教的なイメージ、罪、疾患、エロス、自殺願望等のイメージが詩に取り入れられていく。朔太郎における内面の発見は、彼が唱える自我のリズムによって形成されるイメージに基づいている。その分析を行ったうえで、生命衝動と破壊的衝動が朔太郎の創作における二元性であることを確認した。両者ともに詩人の肉体は疾患を伴い、引き裂かれるなどのイメージによって表現される。本章では『月に吠える』創作期の詩、リズム観、作詩法の特徴をジェイムズの意識論の観点を通して考察し、自我のリズムの動的な連続性に基づく朔太郎のセンチメンタリズムには、外部世界に対する感傷的で受動的な精神があることを明確にした。また、生死再生という軌道も＜単為生殖＞（parthenogenesis）のような形をとり、不在する他者との交流が不可能な現状をイメージ化し、精神的な幻想及び身体の疾患、断片化によって脱身体の衝動が表されている。このように、政治および社会体制が推進する健全身体と精神という近代の認知論からの疎外状態を強調し、朔太郎はそれに対する反発精神を作品化していたことを明らかにした。

次に、昭和初期に朔太郎の疎外感が故郷喪失というテーマに展開されることに着目し、伝統対近代や日本対西洋等といった二元論を乗り越えようとする『詩の原理』に焦点を当てた。そして、西洋文明を取り入れることによって世界文学としての真の日本近代詩の構築が可能だとする、朔太郎の論理における美の位置を本章では読み解いてきた。すなわち朔太郎の見解では本来国家が管理し、媒介する自己と他者、個人と集団、主観と客観など

の二元性は＜美＞である＜詩的精神＞によって融和できるという側面を論じた。したがって、朔太郎は美学（Aesthetics）こそが、経験的自我と形而上学的な自我、自己と他者、個人と集団、感情と理性などの対立的な観念を媒介する機能をもつと考えていたと言えるだろう。このように、朔太郎の考える近代国家は彼の美的観念と重なったのである。

最後に『日本への回帰』を取り上げ、この時代に故郷喪失のテーマが「虚無」をテーマに展開されていく問題について、次のような考察結果を得た。

朔太郎の『日本への回帰』が出た頃は、東アジアで日本軍の戦争行為の範囲がますます広がり、日本はいわゆる 15 年戦争期の真っただ中であったが、朔太郎は国の戦争行為を否定はしていないが、ナショナリズムは彼の＜日本への回帰＞の動機ではなかった。『詩の原理』と同様に、朔太郎の思考において、国家および近代というテーマは文学表現のレベルで考えられている。すなわち、美的精神を通して立ち向かう問題なのである。朔太郎の思想の到達点とも言える『日本への回帰』は、彼の思想上の転向という展開として評価を得たが、転向というものが権力の抑圧などによってある思想を放棄すること、またある思想か宗教信を別のものに置き換えることであるならば、『日本への回帰』は愛国への転向とは言えないという点を明らかにした。

『詩の原理』の執筆時期に、朔太郎は近代日本の文化の統一性を目差すために、西洋の文明を排除するのではなく、日本と西洋を統合させる道を見出していたが、1930 年代から彼の求める近代化が日本に根付かず、次第に絶望な姿勢を見せていく。すなわち朔太郎の作品における虚無感は、近代化した日本、対、伝統の日本との二元的関係を取り消す想像のトポスであり、近代のエピステームがもたらした＜近代＞と＜伝統＞、または＜国家＞、＜国民アイデンティティー＞、＜政治思想＞といった絶対的な観念に対する朔太郎の閉塞感を示しているのである。

虚無は喪失と敗北を連想させる表現だが、ここで朔太郎が述べる虚無（日本）とは時間と空間と無縁の想像の場所である。それは、近代の絶対的な観念の束縛から脱出しようとする衝動である。朔太郎は近代化以前の日本と西洋化した日本をどちらも求めていない。どちらにも存在しない＜虚無＞は、＜伝統＞と＜近代＞の二元論的な対立の超越を可能にし、新しい日本を構築する基盤となる。したがって朔太郎の虚無は、近代（とそれに反する概念）の絶対性と普遍性から逃れる想像のトポスなのである。

以上のように本論では晶子、啄木と朔太郎を通して、日本近代詩歌の発展過程における中心的な側面を見出すことができた。明治期の浪漫主義の体験を通して、三者における自我意識の形成基盤ができるが、その自我の発見は疎外感の自覚を伴うものであった。この疎外感は単に三者の個人的な状況（女性としての社会的な疎外感、貧困や無職による疎外意識）から生まれるものではなく、三者とも詩人であることと深く関わっている。つまり、近代詩歌を求めて各人が選んだエクリチュール（言葉、文体、イメージ）に主体性の追求が反映されていると言える。しかしその一方で、内面を表現する新しい作風を求める三者は、象徴性豊かで難解な言語を使うという点では、当時の社会体制にとって異質なものであり、近代国家が求める国民の均質性に適応できない意識から生まれる疎外感を表していたとも言える。この疎外感に含まれる自己と他者との隔たりは、三者の創作においてそれぞれ異なる形となって現れるが、その根底では近代の二元論的な思考様式によって開離した心と体の統一願望が演じられている。このように、三者の文学表現において身体表現が中心的な主題となっていることを本論では明らかにしてきた。この身体表現は反社会体制的な姿勢を示唆しており、三者のその後の思考展開においても、現状の近代国家体制という絶対的観念から逸脱しようとする姿勢を見ることができる。晶子の帝国主義に投影する＜コスモポリタン・ユートピア＞、＜国家強権＞に対する啄木の敵意識、そして朔太郎の＜虚無＞というディストピアは、すべて主体性を抑圧する国家という絶対的な観念を乗り越えようとする精神を表している。このように、身体表象のあり方と近代国家に対する姿勢との関わりを見ていくと、晶子、啄木、朔太郎は前世代の浪漫主義の詩的精神を時代の変遷に伴ってさらに発展させ、次の世代の詩人への架け橋となったという点で、日本近代詩の発展過程において非常に重要な足跡を残したと言えるのである。